

ため、機を逃さずに摘んでおかねばならない。

「この豊かな実りを当たり前と思うて、腐るに任せておくとはもったいなき限りだな……」

つぶやきながら山桃を摘むのに励む男は、まだ若い。

細身の体つきで背が高く、足も長めだった。

面長おもながで鼻筋のきれいに通った顔は色黒。やせてはいてもたくましさを感じさせる。表情がもう少し豊かならば、町の娘たちも放っておかないであろう二枚目である。

男はせつせと山桃を摘み取っては、持参のかごに入れていく。指は太いが、爪の手入れも行き届いていた。

墨染すみぞめの単衣ひとえと袴はかまをまとい、黒鞆くろふとの脇差わきざしをへそ前に、刀を左の腰に差している。袴をふだん着にした上で帯刀たいてうしているので武士には違いないが月代さかやを剃らず、伸ばした髪を束ねただけの髪形から察するに、浪人者であるらしい。

武家の子は十四か五になると元服げんぷくし、大人の仲間入りをすると同時に額から頭を剃り上げ、両側だけ伸ばした髪を束ねて鬘まげを結う。いくさ場で兜をかぶって頭が蒸れるのを防ぐための工夫だが、平和な時代になってからは成人のしるしとして、庶民の間にも広まった。武家の生まれでありながら鬘を結わずに許されるのは、元服前の子どもと隠居、そして仕える主君を持たない浪人者だけだった。

徳川家康が天下を取り、征夷大將軍となつて江戸に幕府を開いてから二百年が過ぎていた。かつて乱世らんせいと呼ばれた

時代には各地の大名が互いに争い、領土を奪い合ういくさ  
が絶えなかつたが、徳川の天下で合戦は御法度ごほつと。すべての  
大名は將軍に従い、割り当てられた藩を治めるだけの立場  
となつた。

いくさがなくなつたのは喜ばしいことだが、太平の世は  
大名たちにとっては生きにくい。決まつた収穫でやり繰り  
しなくてはならない上に、將軍家に忠誠を誓つたあかしの  
人質として妻子を江戸の藩邸に住まわせ、自らも一年ごと  
に国許と行き来する参勤交代を義務とさせられているから  
だ。江戸での暮らしと道中の費用は大きな負担で、新たに  
人を召し抱える余裕も持てない。徳川の天下は平和である  
反面、仕官する先を求める浪人にとつても生きにくいもの  
であつた。

浪人の中には貧乏を重ねた末に身を持ち崩し、辻斬りつじざりや  
盗人あしずの仲間に加わる者も少なくない。

しかし山桃を摘む男は世間の浪人たちにありがちな、世  
をすねた雰囲気とは無縁であつた。

表情が変わらずとも、楽しんでゐるのは態度で分かる。

照りつける日射しの下で休むことなく手を伸ばし、赤い  
実を足元のかごに入れていく。

熟した山桃でかごがほとんど埋まつた頃、元気いっぱい  
の声が聞こえてきた。

「せんせーい！」